

「中世ってどんな時代？」

～タイムスリップを活用した、時代のとらえ方～

神奈川県公立中学校教諭

はじめに

画像資料は、多様な内容を含んでいて、読み取る側の視点によってさまざまな活用が可能になる。帝国書院の教科書の特徴である「タイムスリップ」は、現存する絵巻物などをもとにイラスト化したもので、「史料」そのものではないが、中学生が活用しやすいように工夫された「よい教材」(「中学生の歴史 初訂版」p.64～65)である。今回は、この「よい教材」を活用して、中世のまとめを行いたいと思う。

「タイムスリップ」をより有効に活用するうえで、教師が留意するポイントをいくつか示してみよう。

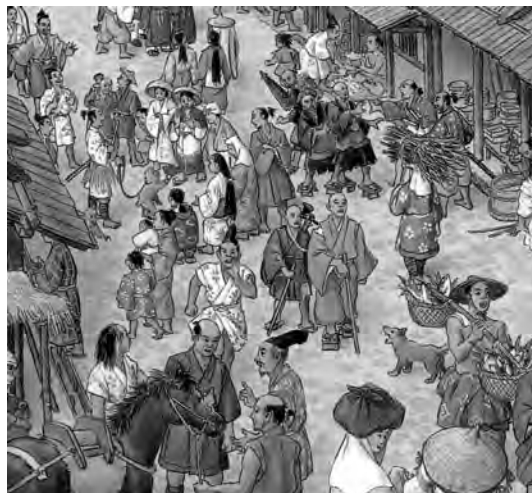
①本文記述との関連をしっかりと把握しておく

指導者が、イラストと本文の関係をしっかりと把握しておかないと、せつかくの生徒の読み取りを台無しにしてしまう。歴史の授業が無味乾燥なつまらないものに陥ってしまう理由の一つに、授業者がその時代相を生き生きと描き出せていないということがある。たとえば、足利義満が政権をとっていたころ、人々はどんな暮らしをし、どんな思いや願いをもって日々を暮らしていたのか、義満の周囲にはどんな人々がいて、何を語っていたのか、そういうことにふれずに授業をするので、生

徒がビジュアルにイメージを描くことができないのである。ところが、このタイムスリップを利用すれば、「本文で出てきた人物が活躍した時代は、こんなふうだったんだよ」と、言葉で説明せずとも生徒に示することができるのである。

②画像資料のすぐれている点を、十分に生かしきる

画像のすぐれている点は、一度に(同時に)多くの要素を見せてくれるところにある。別々に学習してきた諸事象が、いっぺんに表現されている。また、人と人、人と物の関係が見えやすいということも大事である。武士と僧、女と子ども、人と建物、人と道、こうしたもののそれぞれの関係性が見て取れるのである。



ここには武士、僧、商人、女性、子どもなどいろいろな人たちが描かれている(「中学校の歴史 初訂版」p.64)

③視覚の認識を用いる学習になる

多くの歴史授業で、生徒は、教師の話を聞いたり、本文を読んだりすることで情報を得ている。文字を読むこと、話を聞くことが歴史学習だと思い込んでいる。ところが、画像資料を用いると、全く違う知覚を用いて「学習」をはじめることになる。このことの効用とまたマイナス面を事前に考慮して授業を展開することが大切である。

ウォーミングアップ1

まずは、ウォーミングアップである。画像資料を使い慣れてもらうために、見方を習得させるのである。

- ① 動物の種類とそれらの頭数を調べてみましょう。
- ② 男性と女性の比率はどれくらいになるか調べてみましょう。
→ 女性と男性を、どのように見分けましたか？
- ③ 服（着物）の色は、何色の人が多いか数えてみましょう。

この3つの問いでも、おそらく30分程度の時間が必要であろう。ここで、わかったことは、あとで活用できるかもしれないので、メモしておきたい。このメモのさせ方も非常に重要である。

私の場合は、画用紙や色上質紙などを配布して、そこに折り目をつけさせてマスを作らせ、それぞれのマスにメモをさせていくようにしている。カードを作ってもよいし、ノートに書かせてもよいが、あらかじめ問いが書いてあるワークシートにすると魅力が半減するように思う。

2 ウォーミングアップ2

- ① 店、船、建物などに注目して、気づいたことを述べてみよう。
- ② 人々の関係に着目してみよう。会話をしている人たちはいるだろうか？ 怒っている人や笑っている人はいるだろうか？
- ③ 身分に違いはあるだろうか？

これらは、産業や身分、それぞれの関係性などについての問いであって、いよいよ教科書の本文と関係が深くなっていく。これまでに学習した内容に戻りながら、時には教科書の該当部分を示して確認したいところである。



店、船、建物（「中学生の歴史 初訂版」p.65）

3 中世は武士の時代？

「中世は武士の時代」といって、普通は誤りではないし、むしろそういう捉え方こそ、今回改定の学習指導要領で「時代を捉える」ことの大切さをいっているのだから、必要な表現であると思う。しかし、この「タイムスリップ」を読むと、武士の数は圧倒的に少ない。都市の絵であるので、当然ではあろうが、果たして中世を武士の時代といい切ってよいかどうか、子どもは疑問に思うに違いない。それは、今、子どもたちが暮らす時代にも同じことがいえて、500年後の歴史学者が、今の時代を「資本家の時代」と語ったとすると、「労働者たち」

は「ちょっと待てよ」といいたくなるのではなからうか。とくに子どもは「自分」に関わることによって、学習対象に対する関心が高まるので、「普通の人々」や「子ども」「女性」「動物」といったことに焦点を当てると、がぜん授業への参加意欲が高まるのである。そういう話を語っておいて、次に課題を示すと効果はてきめんである。

4 気に入った場面を切り取って模写してみよう

絵画資料を用いて学習するときに、最も効果的な学習方法が「模写」である。これは、いろいろな場面でその有効性を主張してきたが（帝国書院でも最新版の教科書（平成14～17年使用）では体験コーナーで大きく扱っていた）、なかなか広まらない学習方法である。しかしとても有効なのでぜひ取り組んでほしい。まず、「自分の気に入った場面を切り取る」こと自体に非常に意味がある。教師の側からすれば、子どもたちがどの部分を気に入るかということが、自分の授業の批評にもなってくる。そして、次に模写することで、生徒は資料を「よく読む」ことになる。ただ眺めているのと、ぐっと範囲を狭め、それを



生徒が模写した作品



「中学生の歴史 初訂版」p.47

写し描くのとでは、資料への気づきに雲泥の差がある。模写をすることで、人物のしぐさや表情、着物のしわから生地や文様や染め、髪の毛の長さや結び方など、多くのことに「気づく」のである。模写が終わったら、気づいたことをすべて書き出させることが大事である。箇条書きがよい。全部書くように指示する。

5 みんなのものにしよう

模写と気づいたことを書く作業が終わったら、「中世ってどんな時代か」を考えるうえで、役に立ちそうな気づきを3つに絞らせて、それを前に出て黒板に書かせる。一人に1つ書かせるようにして、他の人と重なってもよいように3つ選ばせておくのである。40人いれば40の意見が黒板に書かれることになる。その中から、もっとも大事なことを生徒に意見を出させながら「クラスの結論」として絞っていく。



生徒に黒板に書かせるときいきとした授業になる

6 まとめ

ここまでくれば、もう授業は成功といえる。あとは、まとめをしていくだけである。ウォーミングアップからここまでの学習の軌跡を振り返り（ここで、画用紙に折り目をつけたマスごとにメモをさせておく）と俯瞰できるのである）、今一度「タイムスリップ」を眺め、さらに、これまでの中世の授業を振り返りながら、子どもたちにまとめの作業をさせていく。ここでは、いろいろなワークシートが考えられる。子どもの状況や教師の個性に合わせて、使用しやすいものを作成するとよい。私は、ここでは、「中世の人たちの思いや願って何だろう？」という問いを立てて、生徒に意見を書かせたい。そのとき、誰の立場に立つかを決めさせて、わかる範囲



生徒の模写が並んだだけでも楽しい

でよいので、自分なりに「きっとこんな願いをもって毎日を暮らしていたのでは」ということを書かせるのである。文字数は100～200文字で十分であろう。かつて、これに似た授業を実践したとき、「中世の人たちは平和を願っていたのではないか。だから仏教が庶民に広がったのだと思う。実際の社会は戦いや

争いが多いから、庶民はきっとそう思っていたに違いない」という意見を書いた生徒がいた。また、「生産力が上がって都市には活気があった。もっともっとよくなることを期待していたのではないか」と書いた生徒もいた。こうした捉えをしたうえで次の時代の学習に進むことで、歴史を自分なりに描く力がつくし、時代を比較したり、当時の人たちの立場に立って考えたりするようになっていくのだと思う。

おわりに

今回の新学習指導要領改定の主旨でいうと、「時代の捉え方」を各時代ごとに実施し、自分なりの時代像を描くことが大事になってくるし、分析する力、論述する力が大事になってくる。またPISA型学力という視点から見ても、画像資料の読み取りなどは、非常に重視される場所である。

ただし、そういうことばかりに気をとられて、単元ごとに作文ばかり強要しては、生徒は歴史学習が嫌いになってしまう。まずは「歴史っておもしろい」と思わせることが第一で、その思いを言葉にできるように私たちが工夫していくことが肝要である。そういう意味で、帝国書院の教科書にある「タイムスリップ」は、学習指導要領の主旨も生かしつつ、歴史学習のもつ楽しみを広げられる、すぐれた教材であるといえるのである。

参考文献

黒田日出男『増補 姿としぐさの中世史』平凡社 2002

『絵画史料で歴史を読む』筑摩書房 2004

渋谷敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『日本常民生活絵引き』平凡社 1984

網野善彦『日本中世の民衆像』岩波新書 1980